

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

## イタリア語を学んで

石川 美智子

イタリア会館で学び出してまもなく7年になります。退職後の楽しみに、と大きな目標もなく始めたイタリア語の勉強ですが、それを通して予想もしなかった多くの経験をする事ができました。そのいくつかをここに振り返ってみます。

### <ランベルトさんとの出会い>

5年前、フィレンツェに3週間の短期留学をすることになりました。その出発直前、たまたま新聞の書評欄で、『仕事万歳 ランベルト君の徒弟日記』という本についての記事を目にしたのです。曰く、

「これは1946年、13歳でブロンズ細工の工房に弟子入りしたフィレンツェの少年の書いた日記である。

この本を読むと、いかにしてイタリアの職人というものが育成されていくのかがよくわかる。そういう意味でも貴重な資料であるが、何よりもこの少年が生き生きと仕事に取り組み、仕事を覚えていくことに満足を感じていること、親方やまわりの人々、家族がそんなランベルト君を暖かく見守っていることにも感動する。

働く、という事から遠い状況で生活する今日の日本の少年少女に是非読んでほしい本である」

フィレンツェというこれから自分が行く街の話であることから興味を持ち早速この本を読んだ私は、すっかりこの日記の作者、素直で明るいランベルト少年が大好きになりました。そしてフィレンツェに着くと、彼の働いた工房のある“セツラーリ通り”というところを覗きに行ってみました。それは何百

年も変わらないようなたたずまいの中に今もたたくさんの工房のある通りでしたが、思いがけず簡単に、「Bottega Bronzino Duccio e Lamberto Banchi」と金色の文字が書かれたガラスの扉を見つけました。思わずドアを開けると、そこに81歳になるランベルトさんがいたのです！

いきなり飛び込んで来たイタリア語もろくにしゃべれない日本人を、ランベルトさんと息子のドウッチョさんは暖かく迎えてくれました。そしてそれから5年、私はランベルトさんと文通を続けています。私の間違いだらけのイタリア語の手紙に、ランベルトさんはいつも愉快的な返事をくれ、彼の手紙から、イタリアの生活や家族の結びつき、季節の行事等イタリアそのものを感じています。



【ランベルトさん親子】

私がこうしてランベルトさんに出会うには、多くの奇跡のような偶然がありました。そもそも彼が日記を書いたのは、お母さんが13歳という若さで働き始めた我が子が学校の勉強を忘れてしまうのでは、と心配し、日記をつけるように勧めたか

らでした。8 か月ほどで終わったこの日記は、その後 40 年以上も机の引き出しに放り込まれていたのですが、その後有名なブロンズ職人となったランベルトさんが、ある日小学校の先生と話をしていた、「子どもの頃に書いた日記がある」と話したところその人がそれを持って帰り、大変感動してフィレンツェで出版される運びとなったのです。それをまたちょうどそのころ、家具の修復の勉強に来ていた日本人の小泉和子氏が知り、中嶋浩郎氏の訳で、丁寧な解説も付けて編集し、それが日本で出版されたのでした。それでもその出版からすでに 20 年以上が経っていましたから、この本が新聞で紹介され、それがこれからフィレンツェに行こうとしていた私の目に入ってきたというのは、本当に信じられないような幸運な偶然の重なりでした。



【ランベルトさんの作品】

親方が亡くなった時、その家族の希望でランベルトさんはセツラーリ通りの工房を買取りましたが、そのために必死で働いたそうです。今ではたいへん有名なマエストロですが、日記を書いた少年のままの方です。日記に「僕は店に行くのがいつもとても楽しいけれど、もう少し仕事ができたらもっと嬉しいだろうと思う」と書いた少年は、70 年後も私への手紙にこう書いています。

「毎朝仕事に行くのがうれしいのです。まだ自分が役に立つ、と感じられますし、今も頭に浮かぶアイデアを作品にすることができますからね」

今年も 1 月にフィレンツェに行ったのですが、ランベルトさんはお家での昼食に何度も招いて下さり、奥さんやドゥッチョさんのご家族、お孫さんたちの強いつながりを見ていると、イタリアの家族の温かさを感じます。またランベルトさんとそのご家族のおかげで、フィレンツェは私にとって特別な街となりました。

#### <再度のスピーチ・コンテストへの参加>

毎年 12 月に東京で日伊協会主催のスピーチ・コンテストがあります。参加希望者はまず原稿を提出し、選考の結果出場者 10 名が選ばれます。当日は各自 5 分以内のスピーチの後、3 分間イタリア人の先生からの質問に答える時間があり、すべてを含めてスピーチ力が評価され、入賞者が決定します。

実は 2 年前にも参加経験があるのですが、この時はスピーチ後のイタリア人の先生からの質問が理解できず、壇上で途方に暮れたという経験があります。それにも関わらず昨年再度チャレンジしたのは、ぜひともこのランベルトさんのことを話したい、という思いからでした。

昨年度のコンテスト最終参加者は私を入れて 10 名でした。約半数が大学生、あとの半数は社会人でした。スクリプトは配られないので私の語学力では一部しか理解できないのですが、みなさん流暢なイタリア語で感情をこめてイタリアとの出会いを語られました。

審査の結果、10 名中 6 名が入賞するのですが、もちろん段違いに格下の私はそれには入りませんでした。それでも今回、スピーチの後のイタリア人の先生の質問の内容が理解でき、つたないな

がらもともかくも答えられた、ということに、自分としてはささやかな満足感を得ることができました。

#### <検定試験>

勉強の励みに、というか自分にプレッシャーをかけて勉強に追い込むために、毎年イタリア語検定試験を受けてきました。4級、3級はすんなりいったのですが、準2級では苦勞して、2回不合格が続く3回目ようやく合格することができました。そして昨年、2回目の挑戦で2級に合格しました。これについては思うことが二つあります。

一つは、今回合格はしたのですが、その成績からも力不足を感じています。特に長文読解ができませんでした。よく参考書には、「できるだけ辞書を引かずに読む練習をするように」と書いてありますが、それをしていないので、わからない単語があっても一つの文章を読み通して概要をつかむ、という力がついていないのです。また検定試験の長文問題は社会的なテーマや歴史的な事柄を扱ったものが多く、イタリアの歴史や地理、社会的なできごとについての知識も必要です。この勉強をコツコツやらなければ、今不足している学力は身に付かないなと思っています。

もう一つは、2級から2次試験で口頭試問がありますが、話す、という力の弱さについてです。この試験は、当日与えられた4つのテーマの中から一つを選び、イタリア人1名、日本人1名の2名の試験官の前で自分の考えを話し、その後質問に答える、15分ほどの試験です。

2年前、スピーチ・コンテストでイタリア人の先生の質問に答えられなかった苦い経験のある私は、この口頭試問がとても恐ろしかったです。実際には試験官はこちらを促すように丁寧に質問してくれますし、口頭試問で不合格になる人は少ないのですが、それでも私の成績はすれすれの低いものでした。今の私はちょうど2,3歳の幼児と同じで、相手の言っていることは何となくわかるので、単語で返事をしているような状態です。文章で話せるようになるにはまだまだ学習が必要だ、と感じています。本当に2級程度の実力を早く身に付け、次のステップに挑戦できるようになりたいものです。

#### <イタリアへの短期留学>

これまでに4回、フィレンツェに短期留学をしました。いずれも3週間で、慣れた頃に終わりとなり残念なのですが、いろいろな国の人と一緒に学ぶのは楽しいことですし、また忘れられない出会いもありました。

イスラエル人の若い女の子と日帰りベネツィア旅行に参加した時のことです。彼女は、「高校を出て、3年間の兵役を終えたばかりなの」と話してくれました。私が「サン・マルコ寺院を見るとイスタンブールを思い出す」と言うと、彼女が「イスタンブールに行ったの？いいわねえ。私は絶対に行けないわ」と言った時にはハッとさせられました。

また、イタリアにルーツを持つ人やつながりを持つ人がいろいろな国にいることも知りました。例えばスイス人の女性は、「ドイツ語圏のチューリヒで生まれて生活してきたけれど、今度仕事の都合でイタリア語圏のルガーノに暮らすことになったのでイタリア語が必要なのだ」と言ひ、イギリス人の女性も「ロンドンに住んでいるけれどパートナーがイタリア系で親戚もこちらにいる」と。また今回同じクラスになった若い女性も、「カナダのトロントに住んでいるけれど、マンマがイタリア人で、今お祖母ちゃんの家に住まわせてもらってこの学校に通っている」ということでした。

コロンビアやメキシコなどからもイタリアにルーツを持つ人が学びに来ていました。

こうして、語学学校では、イタリア語の勉強の他に、様々な国の人との出会いがあり、またイタリアの一つの側面を知ることができました。

普段のイタリア語の学習では、動詞の活用もすぐ忘れ、前置詞は難しく、いまだに近過去を使うべきなのか半過去なのか迷うことがしばしばという状態で、進歩しているのかわからずがっかりすることの連続です。それでもこうして7年間を振り返ってみると、イタリア語の学習を通してたくさんの新しい経験をする事ができたこと、また多くの人と出会えたことに、あらためて驚きと喜びを感じます。なんとかもう少し自由に思うことを話せるようになりたい、そう願って学習を続けています。

(当館受講生)

## カルクッタと郊外

二宮 大輔

1994年2月、フィウミチーノ。

夕暮れ時に一台の車が砂浜に入ってくる。電話ボックスの前で停車し、男が車から出てきた。電話をかけたいようだが、小銭を持ち合わせていない。続いて娘と思われる女の子が車から出てくるが、男は車の中で待っているように彼女を促す。女の子は車の中に戻る。

男は近くのバラックの住人に両替してもらって、なんとか小銭を手に入れる。電話ボックスに入って電話し始めるが、通話している相手とほどなく口論になる。戻ってくるのが遅いと思って見に来た娘を、再び車に戻るよう促す。

通話相手との口論はさらにヒートアップ。怒りが頂点に達したところで、電話が切れた。仕方なく電話ボックスの外に出て、顔を手で覆い隠してむせび泣く男。終始無関心なバラックの住人たち。男はすぐに気を取り直して車に戻ると、車内に娘の姿がない。焦って辺りを見回すと、娘が海辺で遊んでいるのを発見する。男はゆっくりとそちらへと歩き始める。

ここで画面が停止して、急にエンドロールが流れる。2018年2月に公開されたカルクッタ(Calcutta)の「ペースト」(Pesto)という歌のミュージック・ビデオだ。おそらくは妻に逃げられた男が、砂浜の電話ボックスから妻に電話をかけているのだろうと想像できるが、なぜローマの近郊フィウミチーノの浜辺なのか、なぜ1994年なのか、そして男と女の子はどのような関係なのか、何の説明もない。ミュージック・ビデオなので、当然、全編にわたって歌が流れており、セリフもない。美しい夕日の中を全編3分半ほどの長回しで、まるで映画の1シーンのようなこの男のストーリーと、ドラマチックな失恋ソングが展開する。

歌詞はこのようなものだ。

esco o non esco

fuori è notte mangio il buio col pesto

non mi piace ma lo ingoio lo stesso dai

non fa niente

mi richiamerai

da un call center e io ti dirò

lo sai che io ti dirò

we deficiente!

negli occhi ho una botte che perde e lo sai

perché

perché mi sono innamorato mi ero

addormentato di te

mi sono addormentato di te

〔訳〕

外に出ようか 出ないでおこうか

外は夜 ぼくは闇にペーストを塗って食べる

苦手だけど 気にせず呑み込む なあ

気にするなよ

コールセンターからぼくに

電話をかけてくるんだろ そしたら言ってやるよ

ぼくがなんて言うかわかるだろ

おい 脳なし野郎!

ぼくの目は漏れっぱなしの樽 なぜかわかるだろ

恋をしたからだよ 君の夢に落ちていたからだよ

君の夢に落ちたからだよ

ビデオもさることながら、歌詞も説明のつかない部分が多い。なぜコールセンターから電話をかけてくるのか？ 再帰動詞 *mi sono addormentato* の後に前置詞 *di* が続くのも、通常ではありえないのではないか？ 歌詞自体も完全に映像とリンクしているわけではないようだ。ファンの間では、「撮影されたフィウミチーノの砂浜で変死した詩人パヴリーニへのオマージュではないか」とか「1994年というのはベルルスコーニが政界進出した年だから、大きな異変に気づかない娘がイタリアという国のメタファーなのではないか」といった意見が飛び交っているが、実際の所はわからない。とにかく切ない喪失感を帯びたこのバラードが、多くのイタリア人の、そして私の心に刺





たのだ。

それ以降、私の興味と連動するように、郊外が映し出す映画が増え始めた。いや、郊外に意識を向け始めたから、そう感じるようになっただけのことかもしれない。とにかく「あの映画であそこがロケ地で使われた」と情報を手に入れると、すかさず現地を訪ねるといふうちに、郊外通いが私のイタリアでの習慣になっていった。友人たちからは「まだ飽きないのか」と冷やかされるのだが、私の郊外熱は一向に収まらない。そんなときに出会ったのが、カルクッタだ。彼の歌を聴いていると、美しい都市の裏側にあるリアルという側面を越えた何かが郊外にあると感じるようになった。

例えば『メインストリーム』に収録されている人気曲「ガエターノ」(Gaetano)の歌詞だ。

---

e ho fatto una svastica in centro a Bologna  
ma era solo per litigare  
non volevo far festa e mi serviva un pretesto  
per lasciarti andare  
suona una fisarmonica, fiamme nel campo  
rom  
tua madre lo diceva non andare su youporn  
suona una fisarmonica eee fiamme nel campo  
rom  
tua madre lo diceva non andare su youporn  
per lasciarti andare  
per lasciarti andare

〔訳〕

それでぼくはポローニャの町に鉤十字を描いた  
ロケンカをするためさ  
大騒ぎはしたくない 言い訳が必要だっただけ  
君を手放すために  
アコーディオンが響く ロマのキャンプの炎  
君の母さんは言っていた YouPorn に行くな  
アコーディオンが響く ロマのキャンプの炎  
君の母さんは言っていた YouPorn に行くな  
君を手放すために  
君を手放すために

---

ガエターノという友人のことを歌ったらしいこの曲も、わけがわからない。ポローニャの町の壁にナチスのシンボルである鉤十字の落書きをして、彼女である「君」とわざとケンカをして別れようとする。そしてアコーディオンの音色が、炎の燃える移民ロマのバラックから聞こえてくる。「君」の母さんは成人向け動画サイトを見るなという……。強い言葉のインパクトを持ったこの曲について、大手紙『レップブリカ』のインタビューで、カルクッタはこう語っている。「自分の元彼女や周囲の人のように、故郷ラティーナにいる典型的な左翼にうんざりしていたことがこの曲をつくるきっかけになった。彼らが、ラティーナで唯一感じるフラストレーションだった。あの町のために頑張ろうとしている人たちが嫌いなんだ。なぜって、突き詰めれば、このままでいいから。ベッドタウン？ 最高じゃないか」

シャカリキになって文化的にラティーナを盛り上げようとする左翼(と彼が呼ぶ人々)を挑発するように、左翼の天敵を象徴する鉤十字を描く。それは、何も無いベッドタウンのありのままの姿を彼が愛するゆえの行為でもある。つまりカルクッタは、郊外や地方都市の喪失感や倦怠感とともに、それを包み込む愛情を音楽で表現していたのではないか。ニュースで耳にする、あるいは映画で目にする荒んだ郊外を訪れてみていつも思うのは、そこにも脈々と人々の生活が根付いているということだ。郊外の魅力とは、都市の裏側にあるリアルさとともに、そこで営まれる生活に感じる安心感や人間らしさなのだと思う。カルクッタはそんな郊外への愛を歌うがゆえに、特にイタリアの若い世代の聴き手に共感呼んだのではないだろうか。かくして、名曲「ガエターノ」の切なくも美しいサビ「アコーディオンが響く ロマのキャンプの炎」も大合唱になるのであった。

(翻訳家・当館元受講生)

---

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館  
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4  
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357  
E-mail: centro@italiakaikan.jp  
URL: <http://italiakaikan.jp/>